

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
大学院学生研究
2024 年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院	文学	研究科	日本文学	専攻
研究代表者 (2025 年 3 月現在 のものを記入)	在籍課程・学年		氏 名		
	☐ 博士前期課程 年 ☒ 博士後期課程 4 年		王 羽 萌		
指導教員	所属部局・職名		氏 名		
	文学部・教授		石川 巧		
自然・人文・社会の別	自然 ・ 人文 ・ 社会		個人・共同の別	個人 ・ 共同 名	
研究課題	戦時下天津における日本語新聞と文芸文化ネットワークの研究				
研究組織 (研究代表者 ・共同研究者) ※2025 年 3 月現在 のものを記入	在籍研究科・専攻・課程・学年		氏 名		
	文学研究科・日本文学専攻・博士後期課程・4 年（研究代表者）		王 羽 萌		
研究期間	2024 年度				
研究経費 (1 円単位)	(支出金額) 200,000 円 / (採択金額) 200,000 円				

研究の概要 (200～300 字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)
当該研究の研究目的を含むこと。
本研究は戦時下（特に日中戦争期以降）の天津で発行された日本語新聞について調査し、①現地でどのような文学・文化活動が繰り広げられていたのか、その様相と動きを明らかにすること、②アクチュアリティを引き込む新聞メディアによって、天津在住の日本人「居留民」にどのような共同体を現出させたのか、③同時代の言説を接続しながら、「天津文学」ひいては「大陸文学」と名指すときにどのようなアイデンティティが形成されるか、を明らかにすることを目的とする。具体的に、戦時下天津で発行された日本語新聞の出版状況について調査し、なかでも主要紙である『京津日日新聞』を中心に文芸関連記事を取り上げ、目録を作成し、記事の内容を分析する。その上で、注目される有名な書き手、また現地で活動する〈無名〉の書き手が天津で行ってきた交流・交渉の様相を明らかにする。
キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)
〔戦時下天津〕〔京津日日新聞〕〔文化交渉〕

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

以下の視点を含めて記載のこと。

- ・当該研究は何をどこまで明らかにできたのか(できなかったのか)。
- ・何をもって研究成果(経過)を達成できた(できなかった)と考えられるのか。
- ・自身が設定した研究目的・目標に照らして、その根拠がわかるよう記載のこと。

①戦時下華北地域における新聞統合の動き

1939年半ば以降、華北地域において「新聞統制」、すなわち軍が各地域に乱立する個人経営の新聞を一つに統合しようとする時期である。各新聞が続々と「統制」されていく中で、1941年10月に東亜新報天津支社に統合されるまで(光宗一夫「徐州支社開設から閉鎖まで」『東亜新報おぼえがき 戦中・華北の新聞記者の記録』東亜会、1984年4月)、『京津日日新聞』は比較的に「統制」に抵抗を続けた地元新聞紙の一つである。本研究はまずこの「新聞統制」の流れにおける『京津日日新聞』の立ち位置を分析した。

華北地域における「新聞統制」の動きは同時代においてすでに注目されていた。こうした流れで創刊された『東亜新報』について、関連資料及び研究が蓄積されてきた。一方、『東亜新報』発刊までの過程で現地日本語新聞がどのように「新聞統制」に反応し、どのように吸収されていったのかについてはまだそれほど言及されていない。その中で、天津で長らく刊行し続けてきた『京津日日新聞』を取り上げることで、現地の各新聞が『東亜新報』に統合される動きそのものを可視化することができる。そこで、本研究は同時代における「新聞統制」に関する言説を以下のように整理した。

本研究は同時代に発行された総合雑誌『北支那』の無記名評論欄「北支新聞街」を参照しながら、1939年～1940年8月までの『京津日日新聞』の立ち位置を分析した。1939年8月、北京にある「新支那日日新聞」と「北京新聞」(元『京津日日』の北京版より改題)が統合されて「東亜新聞」が創刊された。統制は陸軍の支持をもとに「国策紙」の創刊が目的であり、「八紘一宇のペン」となることが期待された。そこへ「統制」新聞として登場したのが『東亜新報』である。同時代において「新聞統制」の是非は、資本と「近代的」な運営体制をめぐる評価が揺れていた。言論統制自体には明確に批判的である。しかし、その言論統制によってもたらされた資本や、統制によって整備されていた経営体制については肯定的である。そうした資本や経営体制は同時代においては「近代的」と評価されていた。その意味で言論統制は「歴史の必然」としてとらえられた。同時代の上海では、統制新聞『大陸新報』に対して、従来の新聞『上海毎日』が十分な質を保っていたという。一方で、天津については、従来の新聞の質が低いこと(＝取材力の低さ)が危惧されている。その上で『京津日日』には経営体制に問題があると指摘され、さらに経営状態があまり芳しくないと同時代評で推察されている。また、現地の新聞社では人員の流動が激しく、さらに「新聞統制」の動きによって、各新聞社の記者がどんどん引き抜かれたり転職したりしていたことがわかる。新聞記者たちの転職や異動によって、中国の各地域におけるメディア同士につながりが生じることが予想できるだろう。

②『京津日日新聞』の文芸欄「月曜文藝」について

以上で見てきたように、同時代において『京津日日新聞』が「地場新聞」の一つとして、現地の文学創作にうまく寄与できていないと指摘されていたことから、現地の文芸活動と新聞メディアがうまく接続できないことが読み取れる。こうした「新聞統制」を背景に置いたとき、本研究は文芸欄「月曜文藝」に掲載された創作ものを取り上げ、テキスト分析を行ってみた。

・魔城二児「遺伝」(上下合計2回掲載) 1939年3月13日／1939年3月20日掲載

内地のどこかの村が舞台となる。女学校を卒業した留津子は、周りから勧められた縁談をことごとく断っていた。父親が、彼女の幼い頃、発狂したことを気にしていた。発狂した父はやがて死に、その弟である叔父もまた発狂してしまっていた。母はそんな父と結婚したことを「後悔」しているのだが、留津子は、自分の血に「遺伝されてゆく恐怖」に戦慄する。そして「生理学的な危惧」を抱き、「結婚忌避」をする。結局、留津子は結婚しないまま「耶蘇教」に身を捧げる。物語は、母・民が留津子を思い遣って、「故郷の民も、その後留津子に関しては、絶望的な■観(■は判読不能を示す、以下同)をもつてゐるようであるがそれでも時折「留津も不幸な子供だった」と嘆息してゐる」(「遺伝」下、1939. 3. 20)と、締めくくられる。発狂の遺伝に対する恐怖、それを理由に結婚しないという描写は、いかにも優生学的な発想である。主人公の名前「留津子」は「天津に留まる子」として、明らかに「居留民」の象徴として描かれている。作者は「留津子」に子孫を残さないことを選択させている。このように居留民を象徴する名前を与えられた留津子に自らの代で家を途絶えさせる選択をさせている。ここでは居留民の租界「天津」に対する複雑な感情が読み取れる。

研究成果の概要 (つづき)**・福山治一稜「迷ひ込んだ三十男」(新年文藝人賞入選) 1940年1月15日掲載**

「新年文藝人賞入選」とあるが、おそらく1939年12月11日に掲載された「新年文藝募集」に応募して入選した作品であろう。あらすじは以下の通りである。内地で職工をやっていた「僕」は、妻子を残して一人で天津に金稼ぎに来た。故郷を離れた「僕」は冷たい風の中で白河のそばを通り、苦力を差配する仕事に向かっていく。その過程で「僕」は故郷に帰りたい思いと、内地に戻っても今まで捨ててきた社会的地位が戻ってこないという思いの葛藤に苦しむ。やがて、「僕」は「過去に恋々と思ひ■ふことが男らしくない」と、今までの苦悩を吹き飛ばし苦力の群れに向かっていく。

ここで「迷ひ込んだ」と言ったときは、自分自身が異質な存在であることを常に意識させる。「僕」は自分の仕事(苦力の斡旋)を「女々しい」と規定している。その時、内地にいた時の「職工」の仕事が意識にあるだろう。そして「女々しい」と感じた原因は、「僕」が天津での仕事に対して「迷ひ」が生じたからである。その根底にあるのは、「天津」に対する「憧れ」や「夢」と、天津の「現実」との落差であろう。結局、「僕」は現在天津で行っている苦力の斡旋に邁進することを決意する。

・梅津梅吉「短篇 妹の恋」1940. 8. 19掲載

著者の梅津梅吉について、戸塚麻子によると、彼が京津事情社の社員であると同時に、同誌に複数回小説を投稿し、「小説の小特集「現地小説特選集」」に関わる人物であると同時に、天津現地における文学創作の呼びかけを積極的に行っていたという(戸塚麻子「日中戦争下天津の文学——『京津事情』文芸記事について 付・細目(二)」『常葉大学教育学部紀要』第41号、2021年3月)。梅津は『京津日日新聞』紙上にも「北支文芸人の結成について」(1940年6月17日)と題する評論を発表していた。ここで彼は、日中文化人が文芸を通して交流を深め、「日人に対する尊崇」を抱かせること、すなわち反日感情を、文芸交流を通して解消することを目論んでいる。そのためには新聞文芸欄がその一環としてさらに規模を拡大すべきだと主張している。また、こうした日中文化人の交流は地域区分を超えることを理想としてみている。

これらを背景に、創作としての「妹の恋」にはどのようなことが書かれているのか、それをどのように読めばよいのかを分析する必要がある。「妹の恋」は語り手「私」の妹の恋に関連づけながら、自らの恋愛観を主張するような内容である。語り手「私」は、共に天津にいる妹が日本租界の「やせ形の顔の白いすらつとした」好青年と恋愛関係にあることを知った。ある日、「私」はある出版社「B社」に「大陸の恋愛と結婚」と題する原稿を書いている時、妹の恋愛を思い出し「大陸の若い男性と女性は太い■愛をすることその場合あまり考へすぎた理想など捨てて少しでも素朴な気持ちにならう」という主張を妹に話す。妹の恋愛について聞き出そうとしたところに、妹は急に泣き出し、相手の男性が同時に他にも交際する人がいたという原因で別れたことを言った。それを聞いた「私」は「妹が堪らなく可愛い」と語る。その翌日に「私」はすでに書き上げた原稿を捨て「ほっとした」気持ちになったところで物語が終わる。

創作「妹の恋」の掲載一週後に、秦哲次郎による同時代評が掲載されていた(秦哲次郎『妹の恋』を読んで 1940年8月26日)。この論者にとって何よりも評価するところは、「日常我々が接して居る日本租界を背景に描いて居る」点である。つまり、内容やテーマよりは、天津の日本租界を舞台に描いた小説という点で評価している。物語のテーマとなる「現地恋愛に対する作者の主観」はあるものの、それが読み取りづらい形になっていると指摘している。先述した「遺伝」と同じように、ここでも「恋愛」が主題として描かれている。「私」は「大陸」の男女の恋愛を肯定する文章を「妹」に見せる。「妹」が破局を伝え、「私」は原稿を破棄し、結果的に「大陸の恋愛と結婚」およびその主張が否定されている。なぜか「遺伝」と同じように、恋愛の失敗が描かれている。

このように、文芸欄「月曜文藝」掲載の創作を取り上げてみると、居留民が天津に留まる意味を探るようなテーマが読み取れる。例えば、「遺伝」の留津子が象徴するように、天津には留まらない決心、あるいは留まれないことが示唆されている。また、「妹の恋」で「大陸の恋愛と結婚」そのものが否定されていく。その一方で、「迷ひ込んだ三十男」の主人公もやはり天津に留まるかどうか悩んでいるが、「男らしさ」でその悩みがあたかも解消されたかのように、最終的に天津に留まると決心する。居留民たちは自分がなぜ天津にいるのか、その意義を探る。そのことには、植民者としての自分の姿に対する漠然とした不安がおそらくあるだろう。それはテキストにおいて優生学や仕事の意義を通して表象されている。

研究発表 (研究によって得られた研究成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。なお、成果発表を確認できる資料を合わせて研究成果報告書提出フォームより提出してください(紙媒体等、研究成果報告書提出フォームから提出できない場合は、別途リサーチ・イニシアティブセンターへ提出してください)。

①雑誌論文(著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)

②図書(著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)

③シンポジウム・公開講演会等の開催(会名、開催日、開催場所)

④その他(学会発表、研究報告書の印刷等)

※修士論文・博士論文は含みません。

① 雑誌論文

該当なし。

② 図書

該当なし。

③ シンポジウム・公開講演会等の開催

該当なし。

④ その他

・ 国際シンポジウムでの発表

王羽萌「戦時下天津における日本語文芸活動——『京津日日新聞』の文芸欄「月曜文藝」を出発点に」国際シンポジウム「1930-40年代中日文芸文化の交渉と波動」(主催:科学研究費国際共同研究加速基金(国際共同研究強化B)、代表:大橋毅彦「1930-40年代の北京・上海及び周辺都市における日本語出版物と文芸文化ネットワーク」、共催:立教大学文学部文学科日本文学専修)、立教大学、2025年3月1日、2日